

花と水

一月十七日、私が勤めている幼稚園にかけつけた時は、すでに五百人をこえるひ難者でごった返していました。その時から、私はひ難所の仕事に追われる毎日となりました。

そんなある日、

「きれいな花ですね。」

という声にふり向くと、ボランティアの人気が花だんに見とれていました。それは、全国花のコンクールで最優秀賞をとった自らの花だんでしたが、しん災後はまったく手入れができていませんでした。

「子どもたちにはかわいそうですが、水が無いので、今年はもう花のなえづくりもあきらめているんですよ。」

「さみしいなあ。こんな時だからこそ、子どもたちに花が必要なのかもしれないのにね。」

その一言が、私を目覚めさせてくれました。何としても、花のなえを育てなければと思いました。雨が降るとバケツなどに水をためましたが、三万株以上のなえにはとても足りません。といつて、給水車の大切な水は一できたりとも使えません。川の水しかないと思いました。しかし、生活のための水にも不自由しているひ難者の気持ちを考えると、昼間、ひ難者の目の前で花に

水をやることは、川の水といえどもできません。

そこで、真夜中になると、自動車にポリタンクを積んで芦屋川に水をくみに行きました。頭とこしにかい中電灯をつけ、二、三メートル下の川の水をロープにくくりつけたバケツでくみあげました。こうして持ち帰った水をじょうろに移しかえ、一株一株ていねいに水をやりました。多くのなえに水をやるために、何度も何度も幼稚園と芦屋川を往復し、すべてのなえに水をやり終えるころには、もう夜も明けようとしていました。

ある夜、いつものように水をやつていると、ひ難生活をおくつている人が起きてきました。その人は、水やりの様子をじつと見ていましたが、しばらくして、

「その水はどこからくんできたの？」

と聞いてきました。それがきっかけで二人は話をするようになり、気がつくと、私は花への思いを熱意をこめて語つていました。

「私も手伝つていいかな。」

こうして、ひ難生活をおくつている人やボランティアの人も手伝つてくれるようになりました。寒い冬の水やりは大変つらい作業です。何度もくじけそうになりながら、みんなの支えによつて、水道が復旧するまでの二か月間、水やりを続けることができました。

春になりました。

あの三万をこえる花は、いつせいにさきそろい、登園してくる子どもたちをむかえました。ひ

難生活をおくっている人々にも、心の安らぎをあたえました。

私は、水をもらつた花のようすがすがしい気持ちになりました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。